

アジアにおける種痘

Vaccination in Asia

田崎哲郎

- ①人痘法をめぐらし
- ②アジア各地
まとめ

[論文要旨]

在村蘭学の特色は牛痘法の普及にあるが、その置かれた国際的条件については、あまり論じられていない。

ジエンナーの腕種法はイギリスで普及していた人痘法を応用したものだった。中国の鼻種法の人痘法が、トルコに伝わり、腕種法に改良されてイギリスに渡ったという説がある。いくつかの文献をみると、当時インドから中近東、アフリカにかけて、皮膚を傷つけて植える人痘法があつたようで、その流れの中から、ヨーロッパへの伝播は生まれたようである。アジア各地での種痘は、ヨーロッパの植民地政策として、ヨーロッパ文明の恩恵を施すものとして、行われるところが多かつたといえよう。しかし政府や会社が積極的に行う前に導入に苦心がみられたところもあったようだ。一八〇〇年当時のインドへの導入は、有効な痘苗を運ぶのに困難が少なくなかったが、成功すると各地へ配布され、中国へも試みられたが失敗した。中国への導人は、フィ

リッピンからだった。マニラへはスペイン国王により、植民地へ向けて派遣されたバルミスの一團によるもので、一八〇五年四月に到着した。一月もしない中に澳門に伝えられ、イギリス東印度会社関係者によつて実施され、『咲啓國種痘奇書』が刊行された。バルミスも九月に廣東に入るが、その関係はまだよく分かっていない。中国人による最初の牛痘書『引痘略』も出るが、普及は遅々としており、宣教師医師の来華による教育をまたねばならなかつた。

日本へは一八四九年ジャワからであり、中国に四四年遅れた。しかし日本では十年程で全国に普及した。遅れている間に蘭方医学を学んだ者が増え、全国に散在するようになつていていたからである。このような普及はアジアでは日本のみであった。中国では儒教の絶対的優位の下、知識人の関心が科挙に集中し、実学が尊重されなかつた。日本では科挙がなかったことによる儒教の多様さが関わっているのではないか。